

平成二十三年度 滋賀県立彦根高等学校特色選抜 小論文

受検番号

注意

- * 答えは、縦書きとし、解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。
- * 字数には句読点も含みます。
- * 漢字はかい書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。
- * 2の答えは、原稿用紙の正しい使い方にしたがって書きなさい。

次の文章を読んで、後の1、2の設問に答えなさい。

私は毎日学校に通っている。しかし私は青森県という人口密度の低い場所に住んでいるので、人とぶつかりあうことはめったにない。しかも私は自転車で登校しているので、人とぶつかりあうと立派な事故になってしまう。しかし人口密度の高い都会で暮らしたとしたら、少なくとも今よりは人とぶつかりあうて生活することになるだろう。駅のホーム、電車の中、交差点などさまざまな場所。人が多いとぶつかりやすくなる。

たしかに物理的、身体的にはぶつかりあうのだろう。では、心はどうだろうか。

たとえ人混みの中で人とぶつかりあっても「すみません」か「ごめんなさい」の一言で終わることがほとんどだろう。アリストテレスが言ったように、人間がポリス（社会）的動物ならばその一言はあつて然るべきである。しかしその一言も無くなっている人もいるかもしれない。おそらくその人は人と身体がぶつかることに慣れすぎているのだろう。「袖振り合うも他生の縁」ということわざを聞いたことがあるだろうか。袖が触れあうだけで縁があるというのに、ぶつかっても縁はないというのは、少しおかしい話だ。

そういった日常のささいな他人との接触が他人への思いやりへとつながるのではないだろうか。身体がぶつかっても、それを何も気にしないのでは、見ず知らずの人は木や電柱と変わらない。

偶然ぶつかりあってしまった見ず知らずの人と心がぶつかりあうことはない。しかし、身近な人であればあるほど、身体はぶつかりあうことはなくとも、心はぶつかりあってしまう。ぶつかりあうことが少なくなると他人行儀になってしまうし、多くなりすぎると今度は逆に険悪になってしまう。私は「ハリネズミのディレンマ」に似ていると感じた。「ハリネズミのディレンマ」は二匹のハリネズミが寒さをしのぐために近づけば近づくほど、互いの針で傷つけあってしまうという寓話であり、人間関係を喩えている。これと同じように、身近な人であればあるほど、互いにぶつかりあい、心の針で相手を傷つけてしまう。それは恐れてしまうのは当然だ。しかしそれが分かっている、人間はハリネズミのようにぶつかりあうことを望んでしまう。

しかしこの話には続きがある。ハリネズミは最後には針の痛みと寒さの両方に耐えることができる距離を見つける。同じように私たち人間もぶつかりあいながら、適切な距離を見つけていることができるのである。

だが、私が思うに人とぶつかりあうことの意義は、それだけではない。人間の心は決してあらかじめ正しい形をしていることはない。生まれつきの善人など存在しない。しかし、人と心でぶつかりあつて、あたかも川に流されていく石が川底や他の石とぶつかりあつて丸く、滑らかになっていくように、人の心もあるべき形になっていくのではないだろうか。

私たちは他人とぶつかりあうことで、適切な距離を見つけないながら、人として成長していく、いわば社会という川の中を流されていくハリネズミなのである。

もちろん私たちは木や電柱と共に社会を生きているわけではない。人と生きている以上身も心もぶつかりあつてしまう。その中で私も傷つくことが当然ある。それでも私は人間に生まれてしまった以上、川底の石ではなく、「川底のハリネズミ」という妙な想像上の生き物を目指して、この社会を泳いでいく。それが私なりの「ぶつかりあう」ということなのである。

（第三回 青春のエッセー 阿部次郎記念賞 最優秀賞作品 葛西勝『川底のハリネズミ』による。）

*アリストテレス … 古代ギリシアの哲学者。 *ディレンマ … ジレンマのこと。板ばさみ。 *寓話 … たとえ話。

1 傍線部について、筆者は、どういう意義があると考えているか、五十字以内でまとめなさい。

2 あなたは「ぶつかりあう」ことの意義をどのようなことと考えますか。自分の体験を踏まえて百五十字以上、百八十字以内で述べなさい。

